日本災害看護学会　令和６年能登半島地震・能登豪雨災害看護プロジェクト活動報告

報告年月日：2024 年 11 月８日（金）

活動員：松田朋子　寺田英子

1. 活動期間

2024 年 11 月 5 日（火）8：00～2024 年 11 月７日（木）17：00

2. 活動場所

避難所　：珠洲市立大谷小中学校（石川県珠洲市大谷町１字 78 番地）

仮設住宅：正院地区、宝立地区、大谷地区（高屋地区応急仮設住宅）

在宅　：大谷地区

3. 珠洲市の被害状況

１）令和６年能登半島地震（11 月５日 14：00 現在　石川県庁情報第 169 報）

人的被害 死者：126 人 うち災害関連死：29 人 負傷者：重傷 47 人、軽傷 202 人

住家被害 建物全壊・半壊・一部破損：5,563 棟、非住家被害：6,061 棟

避難所開設数：10 箇所 避難者数：57 人

２）令和６年奥能登豪雨（11 月５日 14：00 現在　石川県庁情報第 29 報）

人的被害 死者：3 人 負傷者：軽傷 9 人 住家被害 建物全壊：9 棟 床上浸水 47 棟 床下浸水 97 棟

避難所開設数：10 箇所 避難者数：40 人

４．大谷地区避難者状況

大谷小中学校避難所避難者数（11 月５日～11 月７日）：26 人（うち 70 歳以上 11 人）

５．支援活動の実際

#)大谷　小中学校避難所#*

避難所の運営面では、住民主体の運営体制に石川県からの行政支援者１～２名を加えた体制で運営されている。行政支援者やわれわれ学会からの支援など外部支援を得ながらも、住民の自主的な協力によりトイレなどの清掃、食事の準備、弁当の仕分け作業が行われていた。毎朝の 8 時半のミーティングで避難所管理者を中心として避難所内の状況や前日の出来事の報告、当日の行事予定、課題などが共有されていた。学会からは必要な情報を提供したほか、避難所内や地域の中で要フォロー者の有無などの確認を行い、当日の行動計画に反映させた。

健康面では、主に住民の方の健康状態の聞き取りと健康相談、創傷の処置、傾聴などを行った（写真１）。住民の方々は、自分で血圧測定をしたり、健康相談に来られるなど自

発的な行動がみられる一方で、服薬管理が困難な方もおられ、処方薬や残薬の整理を支援した。また、11 月７日より公民館に診療所（珠洲総合病院から職員が派遣されている）が再開されたため、受診が必要な方４名の受診支援を行った。診察終了後は「優しい先生にゆっくり話を聴いてもらった」と笑顔を見せる方もおられた（写真２、３）。

生活環境面の支援として石川県の行政支援者、住民と協力してトイレ環境の整備や消毒作業、支援物資が並べてあるテーブルの清掃などを行った。またトイレの不具合で汚水があふれた際も協力して対応した。

食事は朝、昼は各自でランチルームにある食材を加熱するなどして喫食している。夕食は弁当が配給され、在宅避難者の方も毎日取りに来られていた。お弁当の味が濃いとの意見もあり、管理栄養士が来訪した際に伝えたとのことであった。支援団体による炊き出しが不定期にあり、活動期間内にも行われた。その際には在宅避難者の方も来訪し、ランチルームで談笑しながら食べる様子が見られた。

#)高屋地区応急仮設住宅の訪問#*

高屋地区にある応急仮設住宅に在住の女性の独居高齢者宅を訪問した。血圧はやや高値であったが、降圧剤の内服は継続されていた。住宅内を這って移動されている方であったが、部屋は段差のない仕様で、部屋の仕切りはカーテンを設置しているなど、その方の機能に応じた環境になっていた。炊飯器やポット、その他の生活用品なども床に置いてあり、一人で生活できるように工夫しておられた。食料や日用品は移動スーパーで購入しており、スーパーの店員の細やかな配慮もあって、一人暮らしを継続できている様子であった。数人の住民にお話を伺ったが、当地区は住民同士の結びつきが強く、誰でも声をかけている。孤立している人はいない、と言われていた。また元々医療へのアクセスが困難な地域であるが、現在は週一回の医師（外部支援）の往診があり助かっているとのことであった。仮設住宅の生活は意外にも快適だと言われる方もおり、様々な支援がニーズにマッチして提供されているうえに、住人同士の共助も十分機能している様子であった。

#)珠洲　市自然休養村ンター#*

常駐する外部ボランティアの方に状況を確認した。センター内の避難者は 10 名、在宅避難者は 38 名であった。センター内の避難者は全員外出されており、特に健康に問題のある方はいないということであった。

#)エリア会議・情報共有会議#*

ささえ愛センターにて 11 月 6 日 9：00～11：30 エリア会議が開催され、地区ごとの支援担当者内で要フォロー者への支援状況が共有され、ケース毎の支援の方法などが検討された。また同日 13：30～14：30 情報共有会議が開催された。各支援団体や病院などが各地区の状況を共有し、課題の検討がなされた。珠洲総合病院から学会へ、大谷地区の診療

所の再開への協力依頼があった。

#)地域コミュニティ支援#*

１）大谷地区お茶会

日時：11 月５日（火）13：00～15：00

場所：大谷小中学校ランチルーム

参加者数：17 人

内容等：ピースボートと協力して、３回目となるお茶会を開催、タオル体操・琴の演奏・合唱・リンゴのスイーツの提供・川柳を実施した。終始にぎやかに談笑されている様子が見られた。タオル体操では気持ちよく全身のストレッチをしておられた（写真４）。また琴の演奏では美しい琴の音が奏でる調べに静かに耳を傾けていたが、知っている曲が演奏されると自然と口ずさむ様子も見られた。

川柳は「珠洲の未来」をテーマに思い思いに詠んでいただいた。「子供等の元気な声がひびくよに」「珠洲の海いつかは会える友の顔」など明るい未来を展望するような句や美しい珠洲の風景を詠んだ句が多かった。一方で、「珠洲のまち商店なく何食べる」と厳しい現実を素直に詠まれた方、未来を描くことができず、白紙のまま「無理です」とペンを置く方もおられた。被災の状況は人それぞれであり、災害の受け止め方や復興の進み具合も一人ひとりが違う。そのことを実感したお茶会であった。

２）宝立地区お茶会「集いの会」

日時：11 月６日（水）13：00～15：00

場所：宝立第１仮設集会所

参加者数：11 人

内容等：大谷地区と同じ、タオル体操・合唱・川柳を実施した。全体的に明るくにぎやかで、お茶会のお知らせポスターを見てタオルを持参されたり、配茶をすすんで手伝うなど主体的な方も多い。主事の話では、当地区は水害の被害もほとんどなく、仮設での生活にも慣れてきて住人同士も仲が良いとのことであった。

笑い声が響く中で詠んだ川柳は「折れそうな心支えられ仮設に住む」「血圧を測る女性と珠洲語る」などであった。表面では明るくふるまっていても本当は「折れそう」になっていることを素直に表出されている。またわれわれ外部支援者に気持ちを寄せて詠まれた句もあった。

６．支援活動を通しての所感と課題

豪雨災害から約１か月半が経過した大谷地区では、まだ海や川の濁りがあり、道路も未だ山から出る泥水に浸かっている箇所もある。乾いたところでは泥が風とともに舞い上がっていた。復旧作業を急ぐ工事関係車両も多く停まっていたが、ライフラインの復旧にはまだ時間が必要であろう。しかし、避難所や在宅避難者にとって過酷な冬が近づいてい

る。住民や避難所管理者から「寒くならないうちに〇〇をやっておかないと・・・」という言葉がたびたび聞かれ、ストーブ用の灯油の準備や冬物の衣類の準備、カイロの準備などが着々と進められている。この先の気温低下や空気の乾燥に伴う健康問題に対しても十分な準備が必要である。住民を主体として協力して冬の準備に参画していく必要がある。

また豪雨災害による心理的な影響も看過できない。お茶会に参加されなかった住民の方に声をかけると、夜間よく寝られなかったため、ベッドで休んでいたとのことであった。翌日、メンタルヘルスの専門医が避難所を巡回して住民への声掛けをしておられたが、特にメンタルの不調を訴える方はいなかったとのことであった。外部支援者にすぐに心を開くことは難しいことかもしれないが、ちょっとした心身の不調をとらえたら専門家につなぎ、PTSD への移行を防ぐように働きかける時期であると考える。

地震と水害、２つの災害のサイクル上の時間経過を適切にとらえ、その時期に必要な支援の仕方を考えて実践する必要がある。

以上

７．参考写真

写真１　避難所で健康観察をする様子

写真２　大谷診療所の受診支援の様子

写真３　大谷診療所での受診の様子

写真４　大谷避難所のお茶会の様子

※写真の撮影および掲載はご本人の許可を得ています